

グループ・ディスカッションの趣旨説明

【司会（伊地知）】 それでは、これからグループ・ディスカッションに移ってまいりたいと思います。ディスカッションのテーマは、「研究開発における機関の戦略とプログラムの評価指標」としております。ただいまのご講演を踏まえまして、グループごとに、既存の目標、計画、戦略等をベースにして、プログラムまで構造化して落とし込み、それを評価できるような何らかの指標を設定する、という作業をしていただきます。こういったワークショップが初めての方もいらっしゃるかと思いますけれども、これから後はまさに「ワークショップ」であります。皆さん、ここで参加していただいて、いろいろな議論を体験していただいて、一緒にグループごとに成果をまとめる作業をしていただきます。それで、そのときにいろいろ気づいたこと、そういったものを持ち帰っていただくといったことがこのワークショップの基本的な枠組みということになります。

ねらいです。背景については、冒頭、苫辺地室長のほうからご紹介がありましたとおりであります。特にこのグループ・ディスカッションの中では、プログラム評価のための構造化と、それからそこでの指標の設定ということになります。

配付資料の中で説明補足資料というものがあるかと思います。そちらをごらんいただきたいと思えます。

2ページ、3ページに、物質・材料研究機構（NIMS）の概要として、基本方針、ミッション、それから研究内容、重点研究開発、萌芽的研究とあります。その重点研究開発の中でも2つ分かれています。こういった資料があります。

それで、実際に独法評価などがされていたりするわけですが、そういったことは一応置いておいて、まさに皆さんがNIMSの経営陣、あるいは経営陣に直結するスタッフといった立場になって考えていただいて、いかにNIMSが果たす目的から具体的な方法へと、（プレゼンテーションで、構造化のイメージを出しましたが、一番下には、この場合はプロジェクトということになります）、その政策からプロジェクトであるところを目的-手段関係で構造化をしていただくといったことが1つということになります。

時間が限られているので、当然完全なものとはできないわけですが、その中で特にどこか領域を設定していただいて指標を設定するということになります。

これは先ほどのご講演でもありましたけれども、指標で評価をするというより、指標というのはあくまで評価のための証拠として活用するといったことかと思えますが、しかし、配付資料の5

ページに当たるところ、ちょうど右下に13とあるところ、それからもう1枚めくっていただいて7ページ、そちらをごらんください。これはイギリスの政策評価、プログラム評価、そういったところの一種のガイドラインに相当する資料であります。中身については飛ばしますが、この青い枠で囲っているところ、これは指標の設定をするときにどう考えるべきかということで、5つのポイントが挙げられています。それは最初の頭文字をとってSMARTというふうに言われているわけですが、実はめくっていただくと、政府全体のものと、それから7ページにあります、これは教育あるいは研究にかかわる省のところですが、若干違うのです。しかし、実はSMT、Specific、Measurable、Time-bound、特定されていること、測定可能であること、時間によって決められるものである、そういったことは共通して挙がっているので、この指標を考えるときにもそういった観点に沿って適切なものかということ念頭に置きながら考えていただければと思います。

それから、ご講演の中でもあったように、実は評価システムのことも非常に重要なのですが、これはもうこの場では捨象して考えていただくということにしたいと思います。

役割です。主役はきょうご参加の皆さんということで、ラポーターの方に議論をリードしていただくということになります。ファシリテーターはあくまで皆さんと伴走する、まさにファシリテートするということですので、よろしくお願いいたします。

また、グループそれぞれ議論が始まりましたら、冒頭、それぞれのファシリテーターの先生方から、具体的にどういうことを行うか、進めていくかということについてご紹介があるかと思えます。

何もないところではいろいろ議論が進まないと思いますので、物材機構の、例えば、中期目標、中期計画、あるいは戦略に関係する文書、そういったものがありますので、そういうものを材料にしながらご検討いただければ、必要に応じて見ていただければと思います。

それから、実はインターネットに接続されたPCがあります。もし手元にないけれども、ここに探しに行ったら何かそういう情報が得られるのではないかとした場合にはご活用ください。

それからまた、各テーブルには、記録補助用としてのPCがあります。

ラポーターの皆さんについては、ディスカッションの司会を務めていただいて、後ほどグループの討論結果についてご発表いただきますので、討論のまとめをお願いいたします。

それから、書記の方は、討論を記録していただいて、またラポーターの方の補佐をしていただいて、プレゼンテーションのためにつくる資料を作成をお願いいたします。

テーブルの上に、例えば、附箋とか、模造紙とか、そういうものがあります。そういったものを活用していただいて、後でプレゼンテーションに使えるように作成していただければと思います。

特に様式については定めませんので、発表しやすいような形でまとめていただければよろしい

かと思えます。

それでは、始めていただけますでしょうか。

《 グループ A 》

ライター：内藤 哲雄

(独立行政法人 海洋研究開発機構

地球環境フロンティア研究センター センター長補佐

Aグループの内藤でございます。Aグループを代表して発表させていただきます。

まず、我々のグループでは、最初にこの資料の2ページ目の政府目標から実際のプログラムまでのブレイクダウンの仕方を議論するというので始めましたが、個別のサンプルでは議論が特殊化するので、そういうものをやっていく際に、共通的に特にどういうところに気をつけるべきかという論点に、主な議論を行いました。

まず、この評価制度自体が、そもそも「科学技術基本法でお金を増やすかわりに評価をしっかりやります」ということで資金獲得の見返りとして、社会に対する説明力というか、そういうものが求められていることに対応するそもそもの制度である。ということで、最初に書いておりますように、社会的ニーズに向けてどういう分野でどういう役に立つことを目指して行くかということをもまずはっきり表現する必要があります。

この説明の際に、アウトプットの評価のためできるだけ指標化するわけですが、指標の数値化は、ある程度「説明上の形づくり」と割り切ることも必要です。実際の研究現場では、研究より指標の実現に勢力をかけられては、全く役に立たないどころか、有害になることがあるからです。研究現場では、役に立つという感覚よりも、むしろ研究内容がワールドレベルにあるかとか、ワールドリーディングであるかとか、そういうこの研究の世界での位置づけが表現できるような説明の方が効果を持ちます。

それから、研究現場では、そのCに書いていますように、研究テーマが魅力的か否か、高い志を持っているとか、みんなが燃えるとか、そういう表現できない心理的なものが決定力をもった大事な要素になります。一般社会の例でも、ケネディのときの「60年代末までに人類月に立つ」とか、「富士通はコンピューターに社運をかける」とか、そのワードだけで関係者や社員みんなが燃

プログラム評価にあたって留意点まとめ	Aグループ
①プログラムのターゲット設定 a. 分野、用途(社会ニーズ) b. ワールドリーディング c. 魅力的か否か? 数値化は現場では有害→現場の「志」	
②ロードマップの定義 時限の中での出口論 a. 社会のコンセンサス b. 「科学」と「技術」を分けて考える 科学はひらめきが重要で予測できない、技術はロードマップ化して評価 科学は論文数etc、技術は出口論で評価 c. プロジェクトのターゲット設定別に考える 死の谷渡河型、実用化研究 d. 共同研究実施(実用化が見え始めたとき) e. 人集め→人的アウトプット重要	
③ターゲット設定の表現法 a. キーワード、アウトプットの明確化 b. 「役に立つ」事項の指標化 科学→サイテーション 技術→実用的説明	

えて一丸となる。計画書でも、そういうものに近いものを目指してコンセプトをつくるということが非常に重要であろうと思います。そういうことを意識しながら表現を考えていくということが重要になるかと思います。

ここまでのターゲットの設定の話に対して、2点目としてロードマップというのも重要になります。これは分かりやすいことから社会のコンセンサスをとる上で役に立つ、しかし研究内容の上ではそれほど役に立たないというのがロードマップだと思いますが、ロードマップの活用は、世の中に対するアカウントビリティの問題として必要であります。実際やるときは、科学と技術は分けて考えるべきです。科学は、世界で初めて見つけたとか、考えたとか、世界初かどうかというだけで、二番手以下はくずの世界です。技術は、失敗を最小にする知識の体系を纏めるもので2番手、3番手でも良い方が勝つ世界なので、それは全く違うわけです。科学はひらめきの世界で、ロードマップは書きようがない世界ですが、技術のほうはロードマップで書いて計画的に進めるというのが有効な場合が非常に多いということがあります。

どちらにしろ、世の中に対する説明としては、役に立つということを言わないといけない。どこでどういう風に役に立っているか役立ち方かについて表現するしかない。科学の場合には論文のサイテーションが代表的ですが、知識としてこれだけ皆さん使ってくれていますよというのが基本的な指標になります。あとは賞をどれぐらいとったかとか、そういう質の指標もあり得ます。

技術のほうは、どれだけ実用として役に立ったかになります。あるいは、製品設計とか、製造工程であるとか、技術標準であるとか、方法論とか、そういうところでどれだけの改善、改良が進んだか、そういうところで使われたかというのが基本的な評価の指標になります。そのうちどこを特に目指すかということ、プログラム定義のときに、書けるものがあれば入れたほうがいいかなと思います。

その次にはCのところですが、研究は実は息が長いので、「素材の発掘型」とか、「死の谷渡河型」とか、実際に出た素材を世の中の役に立たせるための「応用実用化研究」とか、そういうものを区切って、どこをやるのがきちんとわかるように整理してプロジェクトを設定し、表現することが大事かと思います。

科学技術会議への説明資料を拝見させていただくと、非常にドラえもん型の説明書が多い。「あれも欲しい、これも欲しいといっぱいお願いすればみんな結果が出てくる」ような説明の文章が非常に多いんですが、もう少しターゲットをきちっと区切って明確にしたほうがいいかなと思います。

私の斑はいわゆる国立研が多いんですが、国立研の場合には、技術のシーズなり、実用のもとになる素材を出すところまでが基本的な任務で、そこで評価すべきだと思いますが、それだけでは今の世の中の動きに追いつけない。そこで、実用化が見え始めるときに発展に向けた共同研究の

実施とか、実用に向けての個々のつなぎ措置をとるとかをかなり重視することが大事になっていると考えられるのでここに書いています。

それから、これは説明書には書けない部分が多いんですが、実際のプロジェクトでは、どれだけ必要な人間を集めたかということに成果が比例します。人と手段をどれだけ用意できたか、そこが実際のプロジェクト、プログラムの勝負どころなんです。評価ではこの点はあまり表現されていないようです。

また、プロジェクトの結果としては、今までの議論では、論文とか特許とか、そういうものばかり取り上げられていますが、実際にはケイパビリティとしてのアウトプットというものが非常に世の中で重要な役割を果たします。ケイパビリティはわかりにくいんですが、国立研の場合でいうと、大学とか、よその研究所にどれだけ人をスカウトされたかというのも1つの指標です。それから、鑑定人とか政府の委員とか、あるいはほかの大学の客員教授にどれだけ引っ張られたとか、そういうのもそうです。それから、受託とか、共同研究でどれだけ申し込みが来るか、これがケイパビリティです。こういうのも頭に置いてやっていくというのは非常に重要になるかと思います。

いずれにしても、ターゲット設定の表現法は、このサンプルを見てもそうですが、どれを見ても非常にくどくどして何を言っているかわからないものが多い。要は、国民が理解できるもの、同時に参加メンバーが共鳴して燃えることができるもの、そういうものを目指して、キーワードとか、アウトプットを簡潔に明確にということを心がける必要がある。現存のものは、全体的にちょっとどうかなというところがあると思います。

最後に、先ほどのアウトプットの2で言いましたように、科学と技術では役に立つという説明の仕方が違いますよということが書いています。

簡単ですが、以上です。

《 グループ B 》

ライター：大関 芳 沖

(独立行政法人 水産総合研究センター
経営企画部 評価企画課長)

大関と申します。我々もこの資料に基づきまして、ミッションから研究内容とその後の研究推進のプロファイルを見ながら話を始めたわけです。ですが、それぞれ現場で何が困っているかという話を主体にどんどん話が進むということで、ちょっと議論に終始し過ぎまして、まと

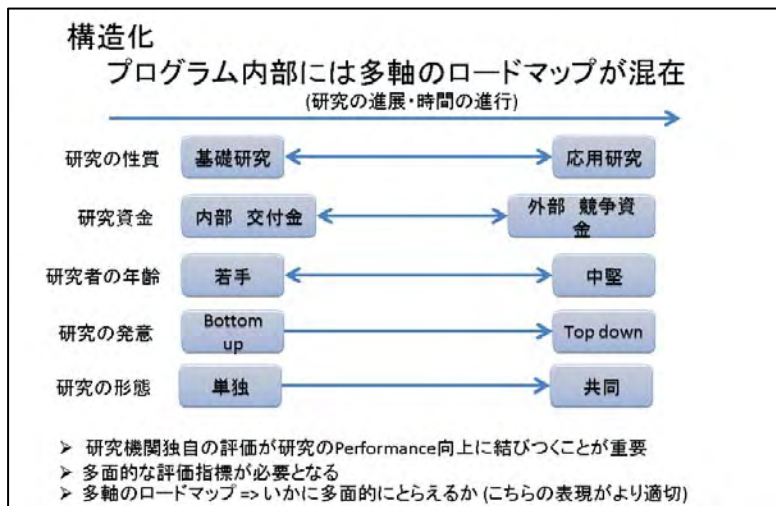
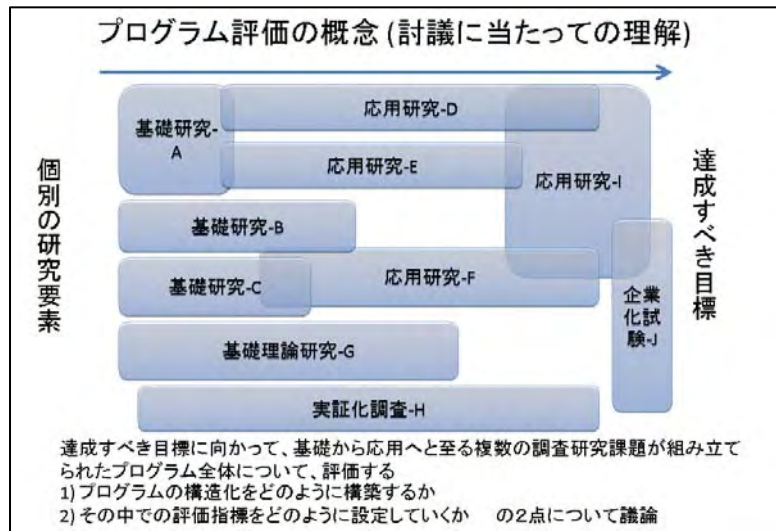
まったものをすぐお見せするというわけにはいきません。整理された点を幾つかお話ししたいと思います。

話題は2つに分かれていて、プログラムの構造化についてどういふもの考えるかという点が1点です。それから、それに対して評価指標をどういふふう考えるかというのが2点目です。

プログラムを考える際に、プログラムというものは、例えばミッションの出口がありまして、その出発点がいろいろなセルに

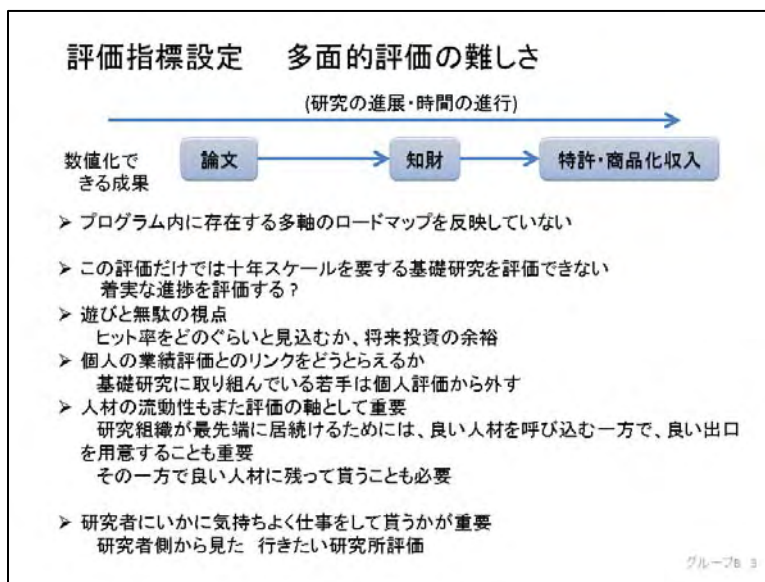
分かれているというときに、まず基礎研究みたいなものがあり、次に応用的なものがいろいろあって、その間にいろいろな研究課題が並べられていて、全体としてミッションの出口に向かっていく。この全体をどう評価するかというのがプログラム評価だというふうに認識して議論を進めました。

この認識に立って構造化をどのように考えるかという、まず一番初めに考えられる点は、基



礎から応用までどのような課題を並べていくかというような点がクローズアップされると思
います。ただ単純に基礎から応用というわけではなくて、非常に基礎的で短期間では結果が出な
いような研究課題も当然ありますし、いろいろなものが並ぶわけです。特にこの中で重要なのは、
構造化に対して多軸のロードマップを描く必要があるだろうということが考えられます。

多軸のロードマップとはど
ういうことを考えたかとい
いますと、例えば、この中に資
金源をどういうふうに見るか。
つまり、研究所で用意する交
付金のようなものから、外部
資金をとってきてやる競争的
なもの、企業から資金を提供
される共同研究といったよう
な違いがあります。また、実
際にそれを担当する人の年代



層、若手がやるのか、中堅クラスがやるのかというような軸も当然ある。さらに、その研究の発
意がトップダウン的に来るのか、ボトムアップ的に来るのかというような仕分けもあります。そ
れから、1人でやるのか、共同研究でやるのかというような違いが考えられます。

これがなぜ重要かという、その次の評価の指標をどうするかというのがこういう問題にかか
わってくるから重要だというのが我々の考え方です。

評価の指標は、こうした多軸のロードマップにそれぞれ対応してかなり変わってくるだろう。
究極的に何を求めているかという、研究所のパフォーマンスをいかに上げるか、こういうと
ころに尽きるわけです。研究所が行っている評価が全体としてミッションを達成しつつ、なおかつ
パフォーマンスを上げるということを考えることが必要だろうということになります。一番初め
の出発点になった基礎から応用というもので見れば、評価の指標は論文であり、例えば特許であ
り、これがどう応用されたかというロイヤリティー収入であると、こういうふうに考えられま
すけれども、ほんとうにもっとずっと基礎的な部分は論文にさえ行き着かないというものがあるわ
けです。こういうときに指標をどう考えるかというときに、多軸のロードマップを念頭に置いま
すと、若手についてはこういう部分を少し外して考える。あるいは、資金源をどうやってとらえ
るか。それから、トップダウン、ボトムアップをどう考えるかというような軸を入れて評価を進
めなければいけないだろう。

結局、結論として申しますと、これは非常に難しい問題なのだとすることを改めてみんなで認

識したというのが我々の得た結論であります。何かいい知恵がほかのところでありましたら、ぜひ参考にしたいと思います。どうもありがとうございました。

《グループC》

ライター：山下 泰弘

(山形大学 評価分析室 准教授)

グループCのライターを仰せつかっております山形大学の山下でございます。よろしくお願いいたします。

我々のグループは、どうやらみんな大学関係の人たちでまとめられていたようで、大学所属の視点からというものを前提に考えてお

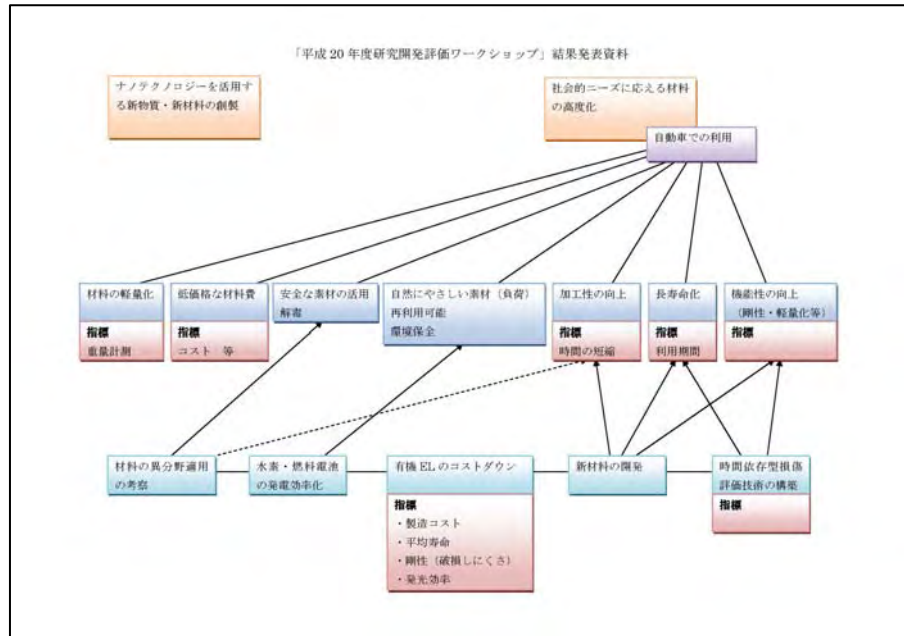
ります。そういう点で、ほかのグループとは随分と課題発表の傾向が違っているのではないかなと思います。

まず、物質材料研究機構の事例から、大目標2点に関して、プログラム評価のための構造化と指標の設定という課題が与えられましたが、我々は材料の専門家とかでは全然ないもので中身のことはよくわかりませんものですから、まず自分たちのわかる課題に置き換え可能な方を扱おうということで、2つの大目標の内、こちらの左の課題につきましては、とりあえずオミットさせていただきました。右側の「社会的ニーズに応える材料の高度化」というものを軸にして全体の構造化を図った次第です。

そして、これでも広すぎて議論がなかなかできないということがございまして、あえて自分たちの身近な課題を仮設し、具体的には「自動車で利用するための素材」ということを前提に議論をいたしました。

さらに我々のグループはみな大学の人間ということで、大学の研究室の活動から創出される研究事例を前提とした、いわゆるボトムアップで物事が運んでいくということを前提としております。今回は、各大学に先生方がいて、その自由な研究活動を阻害しないように先生方が研究していることを基盤にしながら「社会ニーズに応える材料の高度化」という目標、さらにその研究をもとに科研費等競争的資金を獲得するんだ、という方向で議論をしております。

そのために、まずこの大きな目標に対して解決すべきそれぞれの課題をピックアップした次第



です。

ちょっと、この提示資料は見にくいですがけれども、例えば、低価格な材料費であるとか、安全な素材の応用、あるいは再利用可能な材料、そして非常に加工しやすい材料である、そして材料自体の長寿命化、機能性の向上というような課題をピックアップしました。おそらく専門の方から見ればもっといろいろな課題があるかと思いますがけれども、私たちなりに課題を抽出して、さらに任意の5つの研究室で、先生方が材料に関連した自由な研究をやっている環境であるという仮定において、大学として21世紀COEプログラム等への応募に向けた検討をしているという形をとっています。

一番右は物質・材料研究機構の中期計画からピックアップしたのだと思いますけれども、時間依存型損傷評価技術の開発、ほかは燃料電池の効率化とか、このような個別の課題があって、それが目標に対してどのように関連づけられるかというような議論をいたしました。それぞれについて簡単にではありますが、評価指標を導き出しました。何分このような形で議論をするにはいささか時間がなかったものですから、評価指標についてはほんとうに簡単に抜き出して終わってしまったという感じです。

結論としましては、(大学ということ为前提にしたわけですがけれども)先生方の必ずしも一方向に向かっているわけではない、多様な分野・領域における研究活動というものを前提にして、しかも必ずしも的確な人材を獲得できるとは限らない、そのような制約のもとでこのような想定にて研究開発の目標設定を行うというのは非常に大変だなという感想を持った次第です。

ほかのグループの方々からもいろいろとお知恵を拝借できたら幸いです。

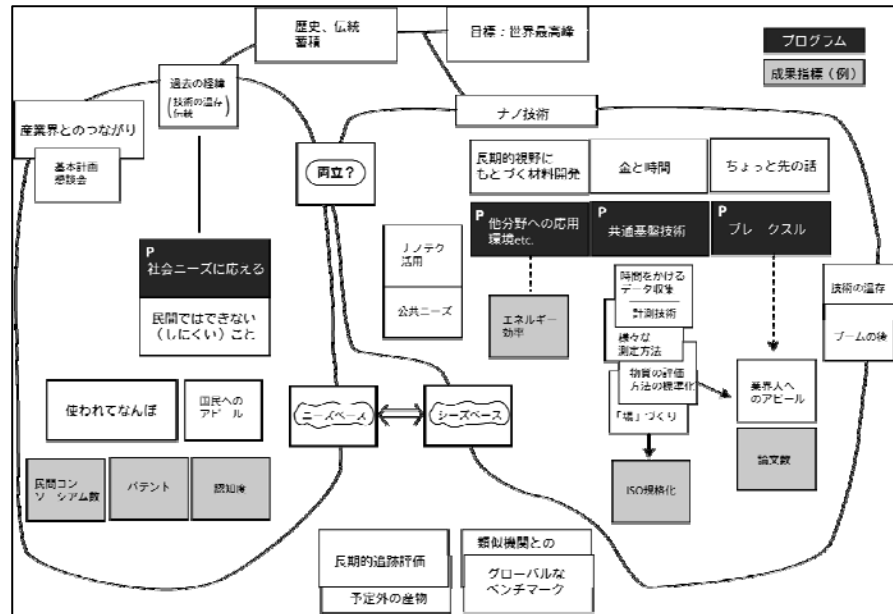
《 グループ D 》

ライター： 嶋田 敏行

(茨城大学 評価室 助教)

参加人員の関係でファシリテーターと文科省の職員で構成されましたグループDの発表をいたします。茨城大学の嶋田と申します。

我々は、とりあえずこちら、「NIMSポリシーペーパー」、この緑色の冊子です。こちらに書いてあります「基本的



な考え方」に書いてある目標などをもとに、じゃあ、どういうふうにプログラムをやっているかということを議論いたしました。

目標には、「世界最高峰のマテリアル研究所を目指す」と書いてあります。要するに、打倒マックス・プランクとか、そういうことですね。あるべき姿としては、「長期安定的な研究推進、自主独立、協調研究」。モットーとしては、「新物質創生と、使われてこそ材料」ということですが、基本的なフレームは、『世界最高峰を目指す』、これまでずっと培ってきた『歴史、伝統、蓄積』があるわけですね。そういうところからやっぱり『ナノ技術』でとりあえず行こうというふうに我々は仮想的に思いました。

まず、右側の『ナノ技術』ですが、やっぱり『長期的視野に基づく材料開発』というのが必要だろうと考えます。要するに、なぜかという、短期的にすぐ必要なものなんていうのは民間さんでやればいわけですから、国としてやっていくというのは、もうちょっと先の話、要するに、少し先の話を見越して技術開発をしなければいけないだろうということです。そうしますと、じゃあ、やらなくてはならないプログラムとしては何かというと、ブレークスルーをつくらなくてはならない、ということですね。すぐできるか？、というところはあるんですけども、そういうブレークスルーが出るような研究をやらなくてはならないんだと思うわけですね。

その隣、『共通基盤技術』、要するに、地道にデータを収集したりとか、計測技術をつくったりとか、確立させたりとか、いわゆる民間企業さんが後々「NIMSの技術ですごい助かったよ」とい

うようなところを先を見越してやっておく。そういうことをきちんと確立させて、例えば共通基盤技術だったら、ISOでどれぐらい規格化されたとか、要するに、そういうところが成果指標になってくるようなプログラムをつくっていかなくてはいけないだろうということです。ブレークスルーともども業界の方々へのアピールということがあるわけです。もちろん、こちら論文数もあります。

もう1つは、応用的なもので、例えば環境をどうするか。これもやっぱりナノテクを活用しなくてはいけないだろうというようなプログラムも立てなくてはいけないわけですね。そうすると、やっぱり将来的なエネルギー効率の改善なんかにどれだけ寄与したのというようなところが、プログラムの成果指標になっていくだろう、という風に考えたわけです。そういういわゆるシーズベースの1つのプログラム群が右側のこちらです。

そしてもう1つの流れとしましては、こちら左側のニーズベースのものがあるわけです。やっぱりこれまでの歴史、伝統、蓄積を、あと、それまでの経緯なんかをかんがみながら、科学技術基本計画とか、産業界の方々とのつながりから、社会ニーズに答えていかなくてはいけないというところがあるわけです。要するに、社会ニーズに答えるといっても、簡単に民間さんではできないようなことをきっちりやっつけていこうというところがあります。かつ、それが『使われてなんぼ』というところが、NIMSとしては、社会ニーズに対して応えているかという点で、すごく重要なことになってきます。『使われてなんぼ』というのはどういうことかという、ある意味、「一般国民へのアピール」ができるわけです。社会ニーズへの対応は「業界の方々への貢献」というのもあるわけですが、やっぱり国民の方々へのアピールもしやすい。社会ニーズに答えるというプログラムに関して、成果指標としては、「民間企業さんとのコンソーシアム」がどのぐらいできたかとか、例えば、「パテント」をどのぐらいとったのか、ということで、更に言えば、「NIMS自体の認知度」がどのぐらい上がったのかというようなところが成果指標であるだろうという風に考えました。

目標である「世界最高峰」で、かつ民間さんが簡単にやらないような、そして、ちょっと時間がかかる、お金もかかるというようなことをしっかりやっつけていくということ。そこに長期的な追跡評価、そして予定外の産物というところにもきっちり着目していこうというわけです。そして、シーズベース、ニーズベース両方ともなんですけれども、グローバルなベンチマークというところもきちんと踏まえていけば、世界最高峰の研究所として今後ともやっつけていけるなというようなことを考えてみました。以上です。

全体討論

【司会（伊地知）】 これから全体討論に移っていきます。まずは、各グループからご発表がありましたので、その内容について質問があれば、それをお受けしていくというようにしたいと思います。いかがでしょうか。

私自身、今、4つ、スタートするときに四者四様というふうに申しあげましたけれども、お伺いして、実はかなり共通する部分が上がってきておもしろかったなというふうに思っています。ただ、それを最初に出してしまうと方向を規定してしまうかと思しますので、それは控えてディスカッションしていきたいと思いますが、いかがでしょうか。ほかのグループの発表を聞いて、このところはどうかと、どう考えるのか。いかがでしょうか。

【大関】 私、ちょっと時間の関係で説明のときに落としてしまったんですが、私どものグループで話をしたこと以外に、指標として人材の流動性というものがものすごく重要ではないかという議論がありました。それは、グループAでもたしかそういう話がされていたと思いますけれども、その組織がいい出口を用意して、次から次への新しい人材を入れて、新しい仕事をしてもらって、その方たちに出ていってもらうのが半分、残ってもらうのが半分、それはどういうふうにするのがいいのかよくわかりませんが、そういう努力は研究組織が最先端にいるために非常に重要なことだという議論がありまして、それをじゃあどうやって評価していくのか、全部出ていけばいいというものではありませんので、その部分はものすごく重要だという議論はあったんですが、うまく説明ができないのと時間の関係で落としてしまいました。もし何かもう少し説明があれば、グループAのほうからお話を伺いたいと思います。

【司会（伊地知）】 その点、いかがでしょうか。グループA、、

【内藤】 どういう答え方をすればいいか難しいんですが、人のアウトプットという2のEのところには書いていますが、これは事後評価のときとか、機関評価のときには当然このパラメータを重視すべきだということを考えています。人という場合に、能力を研究でつくって、それを社会に使うというのが実は非常に大きなウエートを占めているというのが実態です。研究開発全体を考えると、工程とか、製品の改善・改良みたいなところが大体7割ぐらいのウエートを占めるんですが、全く新しいものを出すというのは3割以下だと思いますけれども、成果の利用ということを見ると、この7割の部分で特に「人のアウトプット」というものが非常に重要になると思います。

中身はいろいろありますがその説明もいりますか。

【大関】 いや、それで。どうもありがとうございます。

【司会（伊地知）】 ありがとうございます。

【内藤】 今、言い忘れたのでついでに言っておきたいですが、実際にここに書いていますようなプロジェクトとか、プログラムというのは、技術としての種というか、もともになるものがあるって、それを役に立たせるように発展させる研究が実は国研の場合には主流になっています。他方、種の発明、発見そのものは大体全部がアングラ研究から出て、プロジェクト研究から生まれたことはあまりないというのが実態です。したがって、多分、勤務時間中の数%は好きなテーマを好きなようにやれということにすれば、そこからいろいろな本当に画期的なものが出てくると思います。

参考までに申しますと、私は昔、研究者全員から、今、職務としてやっているテーマと、関係ないもので、何をどういうふうにやりたいかというリストを全員に出してもらいました。どういう機材が要るかというのを全部出してもらい、それを委員会で査定して、補正予算で本予算並の資金をバンともりました。通常の数倍の予算だからうまく処理できるかなと危惧していましたが、実際に執行するときにはなんと普通の年の半分の時間で事務処理がすんでしまった。研究者は自分のやりたいことなものであるから一生懸命早くやるし、成果もガンガンと出るということになりました。研究者個々の本当にやりたいことと、国のオーダーで来る長期計画などとの整合性をどうとるかというのは結構悩ましいところですが、リンクさせることで大きく生産性を上げたという経験があります。

【司会（伊地知）】 ありがとうございます。

ほかに、先ほどのプレゼンテーションで言い足りなかったとか、あるいは、ほかのグループを聞いていてわからなかったというのはありますでしょうか。

よろしいですか。

そうしましたら、全体を踏まえて議論を進めていきたいと思います。いろいろお伺いしていて、いま、ほかのグループのことを聞いていて、ここの視点は非常にいい、プログラム評価をしていくために重要なポイントだと思った、というところをどんどん挙げていただくとよろしいかと思うのですが、どなたからでも結構ですが、いかがでしょうか。

構造化と指標の表現の部分と両方があるかと思いますが、まず構造化のほうからいかがでしょうか。

なかなか、今までグループ内だったのが、いきなり全体になると話しにくいでしょうか。

では、内田さん、お願いいたします。

【内田】 理化学研究所の内田と申します。

AグループとBグループ、実は話している内容がかなり近いと考えております。どこの点が近い

かという点、研究者にいかにか気持ちよくやってもらえるかという点で実はかなり近いところがございます。今、Aグループは、発表がありましたとおり、要するに、自分のやりたいことをやるのが一番いいんだというような話がありました。ただ、自分のやりたいことだけやっていれば、研究所というのは研究者の単なる集合体になってしまっていて組織としての機能は失われてしまう。つまり、組織としてのシナジー効果がないということになって、それはそれでまた問題があるわけですね。そうしたときに我々が考えたのが、多軸と言われている、とにかくいろいろな視点で物事を考えようということになります。

研究がうまくいかないときにその原因として何があるか。例えば、自由発想でやりたい人がなかなか外部資金をとれてきていないとか、要するに、まずお金がないからやりたいことができない場合。じゃあ、その対策として所内の何らかの競争的ファンドをつくるか、そういう考え方もあるでしょう。また、その研究者が置かれている立場がひとりで研究できる状況か、あるいはどこかのグループの中に詰め込まれていて、そのグループでのデューティーによって思うことができないとか。そのような立場の違いによってパフォーマンスが発揮できない場合もあるでしょう。また、何か下仕事と言ったら変ですけども、一番元気がいい若手が仕事をするときに、しかるべき仕事についていないとか、そういうミスマッチがあったらどうだろう。また、仕事に関して研究者個人レベルでは基本的にはボトムアップがいいという考え方もあるかもしれませんが、組織としてはトップダウンで最大限パフォーマンスを発揮する場合があります。だから、トップダウンとボトムアップのバランスもあるだろうということ。要するに、研究者に気持ちよく働いていただきたいんですけども、ただ、組織としてのパフォーマンスを最大化するためには、やっぱり資金の話であるとか、グルーピングの話であるとか、あとはジェネレーションの話であるとか、トップダウン、ボトムアップの経営の方針の違いなど多面的な要因があります。そういうところをきちんと多面的に見ないと、例えば個人業績評価ということを考えてみた場合、その人の能力が出ていないとは言っても、実は出ないような環境に置かれているということも考えられるわけで、じゃあ、そういう視点に立って、むしろ経営する側としては、あそこに書いたような多面的な面から再度、自分たちをレビューして、それで経営の改善につなげていくことが必要ではないかということがここで話されたことです。わりとここに集まっている方々は、研究者出身の方も多いですし、研究者の方も多いので、研究者寄りの考え方が多いんですけども、やっぱりいかに研究者が気持ちよく研究できるかという環境のことを考えられるような、数値的な指標にはなかなかないんですけども、経営上の評価の視点としてこうしたことが必要であるということが、このグループで出てきた話ではないかと私は思います。

【司会（伊地知）】 ありがとうございます。

ほかに、こういう点をピックアップするといいいのではということはありませんでしょうか。

そうしましたら、司会の特権で、各グループからお伺いしたところを私なりにホワイトボードに書きながらまとめてみて、またそれを踏まえて議論していただければと思います。

まず、構造化に関してですが、共通してあった点は、例えば、科学と技術は分けるべきだと、たしかAですね。それからBでは、基礎から応用へ。それからDでは、シーズとニーズ。似ているようですけれども、やはり違うんですね。どういうふうにして分けていくといいのでしょうか、というのが1つ論点です。どれがいいかという選択の問題ではないかもしれませんが、そういう論点があるかと思います。

それから2点目、これは共通していたことで、やはり社会に対して言わなければいけないということなのですが、それをターゲットに設定していくのかどうかということが、Aであったかと思えます。

それから、今の議論ですが、Aで、「人集め」、それから「ケイパビリティ(capability)」という表現でおっしゃいましたけれども、別の言い方ですと、例えば組織としての「ポテンシャル」とか、あるいは英語で言うと、よく「リサーチ・ベース(research base)」と言うと思うのですが、そういう人の集合体としての(とりあえず「ケイパビリティ」と書きます。)観点が、プログラムを構造化していくときに必要なのではないかと、ということがあったのではないかと、ということをお伺いしました。

それから、指標もあわせていきます。これもたしかAとBとに共通していたと思いますが、社会のためにどう表現するか、と同時に、その中にいる研究者を奮い立たせる、よりよく活躍してもらうためにはどうしたらいいのか、ということがあったと思います。そのときに、実は両面あって、社会的な観点で言うと、やはり数量的に表すところが、現場、中では、言葉で表す。また、世の中に対しては「役に立つ」、Dにもありますね、「役に立ってなんぼ」でしたか、そういう観점에서、数による表現はあるし、言葉で表すのだとしても、研究者を奮起させるという観点でいくといいのではないかと、という論点があったかと思えます。

それから、構造化に戻って、多軸のロードマップとおっしゃいましたが、対象としていかに多面的にとらえるか、ということがあります。どのように多面的にとらえることができるかということは、まだ議論の余地があるのではないかと、ということを感じている次第です。

それから、Cのグループで言うと、これは大学ということかと思うのですが、研究の中身というよりは、かなり、技術のスペックというか、仕様というか、そういう観点で指標としてとる、という見方もあるということがあったかと思えます。

まだまだこれだけではないですが、とりあえずいままでお伺いして共通するところ、それから似ていながら違うところという部分をとりあえずまとめさせていただきました。これを見ていただいて、なるほどそうだと、あるいはこれはどれにしたらいいのか、このよ

うな議論を深めていきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

おそらくどこの研究機関かということによって当然違ってくると思うのですが、いま、ケースとしては、物材機構さんを取りあえずケースに使っておりますので、そこを対象にして考えた場合ということにしたいと思います。いかがでしょうか。

どれもあり得ると思うのですが、どれがより合理的なのでしょうか。

【内田】 まず最初の科学・技術、基礎・応用、シーズ・ニーズということに関して言えば、科学・技術は今、仕分けは多分非常に難しく、物材とはちょっと離れますけれども、例えば今、iPS細胞なんてはやっていますけれども、あれはもう科学としての有用性は明らかであるんですけども、むしろそれを医療応用に持っていくための、要するに、だめなところ探しをやっているわけで、例えば、がん化の可能性があると、そういうことをどんどん今つぶしていつている最中で、最終的には再生医療に持っていこうとしている。そうした意味で、科学と技術はスパッと分けられることは多分あの技術に関してはなくて、僕らの言葉で言うと、サイエンス・ベースド・テクノロジーであって、サイエンス・アンド・テクノロジーではないんですね。だから、そうした場合、今、基礎の段階にいるのか、より応用に近い段階にいるのかというふうに考えたほうがいいだろうということなので、僕は意図的にここのグループでも科学と技術という言い方はしないで、基礎段階なのか、もう応用段階なのかというふうに分けています。

あと、シーズとニーズというのはちょっと別次元の話なので、それはもう研究側のほうがこれだけのシーズを持っていて、それがニーズと合致するかという話であって、それは時代背景を伴っている話なので、若干別次元の話かなという気がします。

【司会（伊地知）】 この点、ほかの方からは、いかがでしょうか。

はい、お願いします。

【黒澤室長】 私どものほうで科学と技術を分けたときに、ベースにあったのがロードマップの考え方なのです。ロードマップというのは、いいところと悪いところがありますという議論をしていたときに、ロードマップに載らないものがあるんじゃないかというところで科学というものを取り上げました。技術というのはロードマップに載せて議論できるけれど、新しい飛躍とか、セレンデピティーが伴うようなものは、ロードマップには載りにくい。ですから、そこを分ける意味で科学という言葉を使いました。科学と技術という言い方が適切かどうか分かりませんが、ロードマップに載るものと、載らないものを分けて構造化するのが1つの指標かなというふうに思っています。

【司会（伊地知）】 どうもありがとうございました。

先ほどの内田先生の話もですが、同じ指標の中で、こちらは先の利用が見えていることと見えていないこと、あるいは、これは別次元だという話でしたが、社会のニーズに合致するものがあ

るかないかというとらえ方もあるのかもしれませんが。

それでは、ここはいかがでしょうか。この「ケイパビリティ」、組織としていかに人を集めてくるか。どういう人たちがいるのか。流動性を含めてどういうポテンシャルがあるのか。そういうものを構造化するとして、一体それを、どう指標で表していったらいいのでしょうか。

先ほどお伺いしていても、これが非常に重要だということでした。研究機関にとって、何を研究するかということはあるけれども、研究所が研究所としてあるためには、ここが非常に重要だというふうに、私はグループA、Bからお伺いしました。重要であればこそ指標として表して、特に社会に対してはそれを伝えていきたいですね。

はい、どうぞお願いします。

【内藤】 まず最初に、計画段階では、ケイパビリティは実は表現できない。したがって、ターゲットを書いて、そこは黙っておくしかない。プログラミングをやるときは、実は必要な人間をどれだけちゃんと確保できたかということが結果を左右する。勝負はそこで決まってしまう、必要な知識要素が確保できないといい結果は出ない。必要な知識の人を揃えたら、次はライバルとの競争になるけれども、そこではライバルよりも頭数を余計に集めれば勝てるという、研究の世界における鉄則というべき経験則があります。どんな立派なことを言っても、投入努力と原因は比例するという冷徹な原則があります。

しかし、アウトプットとしての評価のときにはケイパビリティをもっと大事にしたほうがいい。どれだけ人がスカウトされたか、使用してもらえたか、その能力をあてにしてどれだけオーダーが来るかとか、そういうのは計画時には言えないが実績では言える。研究成果の内容を量る上では大事なことから、結果評価の指標には入れたほうがいいでしょう。

また、研究に動員したケイパビリティの質量も、始めるときには書けないけれども、決定力はあるから、評価は必要ですね。

【司会（伊地知）】 書けないけれどもとあるのですが、書くのが難しいのでしょうか。

では、今度は指標のほうに移りましょう。指標は、どのように表現するか。まさに表現ということで先ほどありました。数量はどちらかという社会に対して、言葉がもちろん中に対して。しかし、社会に対しても「最終的に役に立つ」ということを表現するためには言葉にならなければいけないので、数量だけで言うのではなくて、数量を使いつつ、いかに「役に立つ」という言葉に直していくのかということが、例えば評価報告書といったところで重要になるといいます。ただ翻つていうと、指標を設定するときに、こういうようなことが書けるように何かいい指標をとらなければいけないということがあるかと思うのですが、このあたりでご意見はいかがでしょうか。例えば、サイテーション(citation)、Aグループのところに出っていますが、科学についてはサイテーションで説明する、技術については実用的説明をするというように整理していらっしゃるの

すが、もう少し具体的になりますでしょうか。

【内藤】 一般の定義とは違う説明になるかと思いますが、私が言う場合の科学というのは、世界一、世界初を競争する世界、フィールドのものを言います。技術というのは、失敗を最小にする知識の体系をまとめる、そういうアプローチをする領域を言います。そのアプローチの差によってロードマップの組み方も違うだろうということがあります。

科学の場合には、「データの凝縮過程」、「思考の凝縮過程」、「ヒントの外装過程」と「検証過程」、この4つをどう効率的にやるかということが基本的なパラメーターになりうると思います。

役に立つという方では、科学では「世界初」ということと、「知識としてどれだけ役に立ったか」ということでいい。だから、サイテーションで量れば、割り切りがいいだろうと思います。

技術の場合には、世界で初めてではなくても、最も失敗を最小にするものが最良であり、実際に世の中のお役に立った事例を集計するということで指標を組んでいくしかない。

ただし、国立研の場合には、シーズの前にジーンズというのがあって、シーズの素になる遺伝子のような知識を出す段階、ジーンズを技術のもとになるものにまとめるというシーズを出す段階、シーズの応用方法を開拓する応用研究段階が主な対象になり、各段階毎のアウトプットに合わせて、分けて考えることがニーズに対応ということになる。

社会的な応用のところについては、実は国立研の先生が考えてモノになるというのは非常にまれで、研究者側からはなかなかろくなものを考えられない。実際には、企業の人とか、世の中の人という成果を使う人が、これは使えるか使えないかということを考えて、自分の活動の中に取り込む工夫をする、これ（必要の母の部分）が決定力を待ちます。そこでは、エンドユーザーとのつながりをどのようにうまくやるかという観点での整理が必要かと思います。世の中の役に立ったというのは、企業の場合には工程改善にどれだけ使われたかとか、新製品がどれだけ出たかというようなことはわりとわかりやすいんですが、国立研の場合、ユーザーは別主体であり、先ほど述べた共同研究とか、提供のための研修や指導とか、ユーザーとの繋ぎのところをどういうふうに整理するかなということも重要なポイントだろうと思います。

【司会（伊地知）】 ありがとうございます。

終了時刻が迫っていますので、まだ議論の中でここにポイントとして挙がっていないけれどもこういうものも重要だとということがあれば、ぜひ挙げていただきたいと思います。

よろしくをお願いします。

【黒澤室長】「指標化」、「表現」、「数量化」、「役に立つ」という点についてコメントさせていただきます。評価の指標を立てて社会に分かりやすく説明するということは、これからますます重要になります。その時評価指標をできるだけ数量化することは、私の講演のときにも言ったと思うのですが、非常にわかりやすいし、大事なポイントだと思います。但し、そのことは非常に危険を持

っているということも言いたいです。

先ほど、サイテーションの話が出ました。これは評価を数量化するという意味では非常にわかりやすい表現になっていると思います。ただ、ちょっと講演のときにもふれましたが、今、マテリアルサイエンスの分野で一番サイテーションが高いのは、中国科学院なのです。数量化による比較が進むと、それがいつのまにか目的化してしまう、または、そういう形の動きが出てくる。そうすると、結局何をやっているかわからなくなってってしまうという、そういう危険性もはらんでいるのです。すなわち、数量にして「役に立っている度」を比較すると非常に国民に対してわかりやすくなる。わかりやすいけれども、それが目的化することの危険性を常に持っています。

1つ私が指摘したいのは、「世界大学ランキング」です。ロンドンタイムズ社が大学のランキングをやっていますけれども、あれも評価指標を定めてポイント化しています。これが非常に世間の関心を集めているのは皆様がよく知っていることです。そして日本も国立大学、いわゆる旧帝大が順番に並んでいるような状況になっていて、ある程度安心するわけです。ただ、それがほんとう役に立つか？というところで、問題も持っているのではないかと、この流れの中でぜひ指摘しておきたいと思っております。

【司会（伊地知）】 ありがとうございました。

まさに単に数量を持ってするのではなく、その後をどう評価報告書とか、あるいは、機関としてのいろいろな公表文書の中で示していくのか、そこに非常に気をつけなければいけないというご指摘かと思います。

もう時間が来てしまいましたので、まだいろいろご議論、ご意見等あるかと思いますが、これで全体討論を終了したいと思います。大変有意義な議論ができたのではないかと、思っております。

II. 参 考

参加者の所属機関・業務内容別内訳

本ワークショップには、以下の機関からの参加がありました。

機 関 名
総務省
国立保健医療科学院
独立行政法人 物質・材料研究機構
独立行政法人 水産総合研究センター
独立行政法人 理化学研究所
独立行政法人 海洋研究開発機構
独立行政法人 農業生物資源研究所
独立行政法人 産業技術総合研究所
国立大学法人 鳥取大学
国立大学法人 山形大学
学校法人 京都精華大学
学校法人 東海大学
大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

また、業務内容別の参加者数は、以下のとおりです。

業務内容	参加者数
評価実務者（事務局職員）	7名
評価実務者（教員・研究者）※法人役員を除く。	5名
評価研究者	1名
その他	2名

グループ・ディスカッションについて

(当日の配付資料から)

○ グループ・ディスカッションについて

グループ・ディスカッションは、参加者同士の討論を通して、参加者個々人が自ら問題解決の糸口を見つけ出すことを目的としています。また、参加者間の問題意識の共有とネットワークの構築も目指しています。

参加者の皆さんには積極的に討論に参加していただき、活発な討論を通して、日頃の業務を遂行する上で必要となる知見と仲間を得ていただきたいと思います。

○ ラポーター、書記について

基本的には、ラポーターの方も書記の方も参加者の一人として、積極的に討論に参加していただきます。

- ・ ラポーターの方は、討論の司会を務めるとともに、討論の結果をまとめ、発表するという重要な役割を担っています。

なお、討論の司会進行、討論の結果のまとめ及び発表の際には、中立・公平な立場で行ってください。

- ・ 書記の方には、討論の内容を記録し、ラポーターを補佐するとともに、討論の結果発表に必要な資料の作成をお願いします。

なお、資料の作成方法は特に定めません。文章書き、箇条書き、図、その他の方法を適宜選択し、討論の結果発表の際に、発表しやすく、また、他の参加者が理解しやすいものとしてください。

○ ファシリテーターについて

研究開発評価推進検討会委員が、ファシリテーターとなって参加します。ファシリテーターの役割は、中立的な立場から、討論の内容には立ち入らず、討論を公平で活発に進めるためのお手伝いです。

討論を有意義なものとするのは、あくまでも皆さんご自身ですので、是非、積極的な参加をお願いいたします。

○ ディスカッションのテーマ

テーマ「研究開発における機関の戦略とプログラムの評価指標」

研究開発プログラム（施策）の評価は、その重要性が指摘されていながら国内では未だあまり展開されているとはいえ、主要諸外国における取り組みとも隔たりがあります。研究開発機関において実施されている研究開発プログラムが、機関の戦略や目標の中で、どのような位置づけ・目的を持って企画・立案・設計されるのか、また、機関においてプログラムを推進する上で進捗状況を適宜モニタリングし必要に応じて改善や軌道修正を図っていくか、そして、一定期間を経過して当初目標としたアウトカムを実現し、またアウトプットを算出しているか、といったことを把握できるようにすることが重要です。このためには、プログラムの内容や性質にも応じて、機関の戦略や目標からブレイクダウンされる計測可能な評価指標の事前の設定と、それに対応した実際の測定に基づく意思決定が有効であるようであり、また、それらの評価指標は、機関マネジメントにおいて取り得る施策に対応することが望まれます。

そこで、実際に行われた研究プロジェクトをプログラムの仮想モデルとし、機関の戦略・目標をベースとした研究開発プログラムの評価指標の立て方について、参加者相互で議論します。

参加者アンケートとその集計結果

参加者に、以下のアンケート票を配付し、記入を依頼しました。

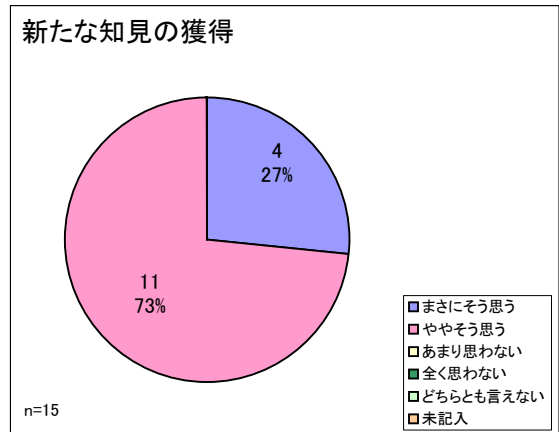
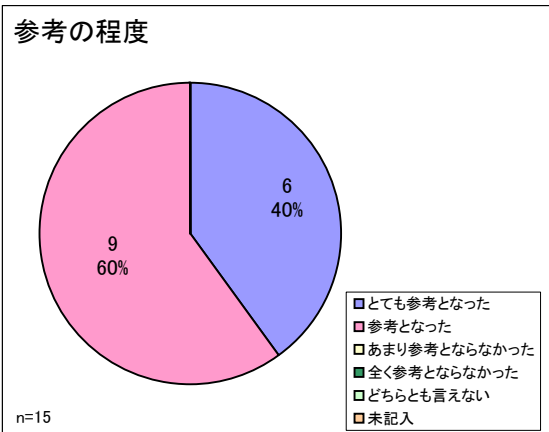
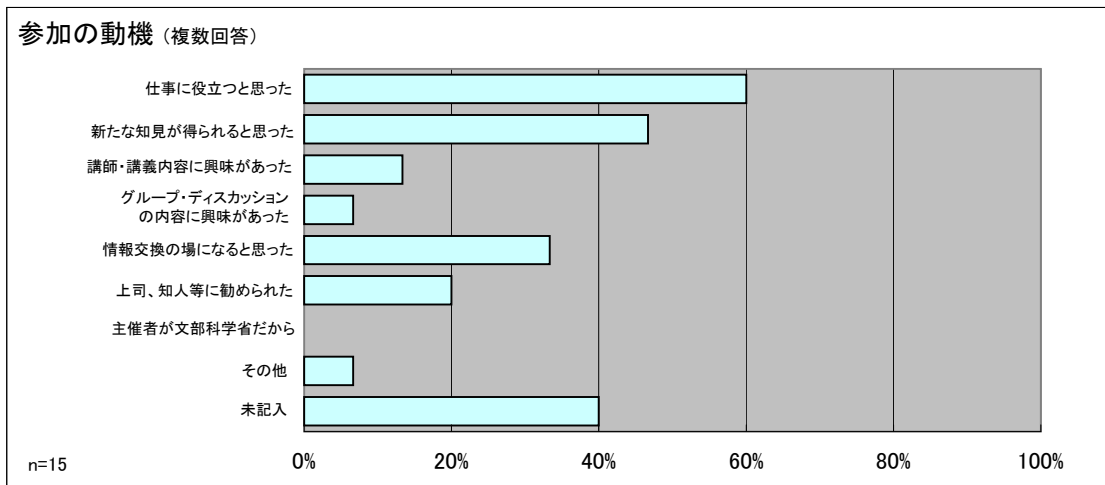
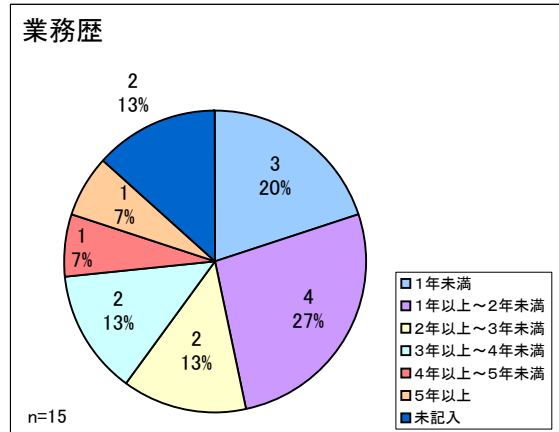
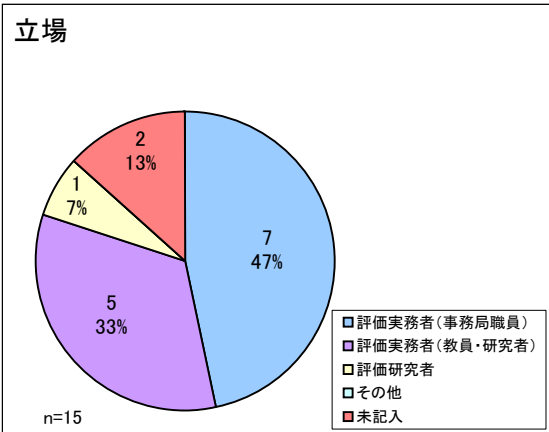
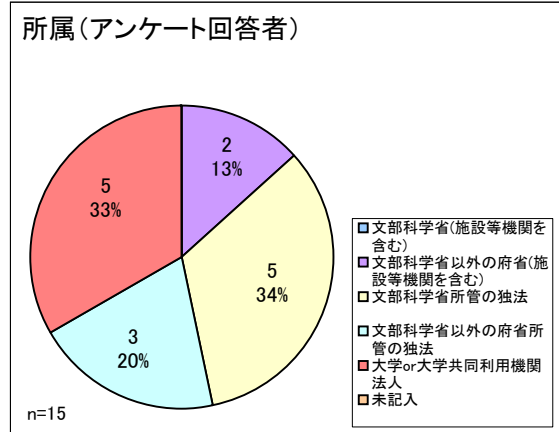
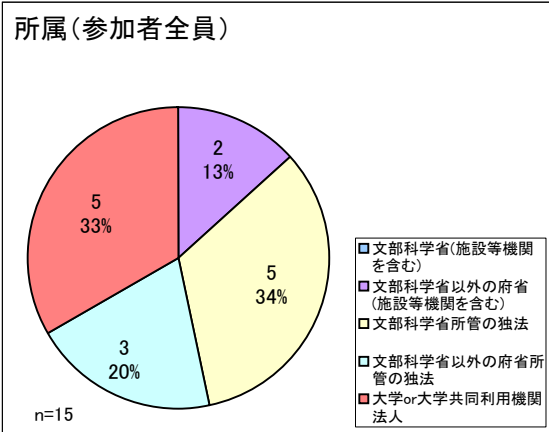
平成20年度研究開発評価ワークショップ アンケート

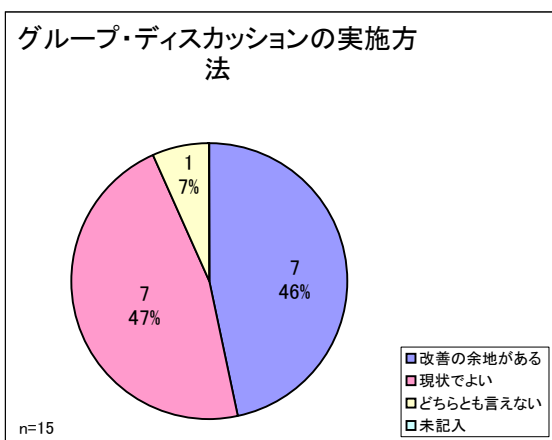
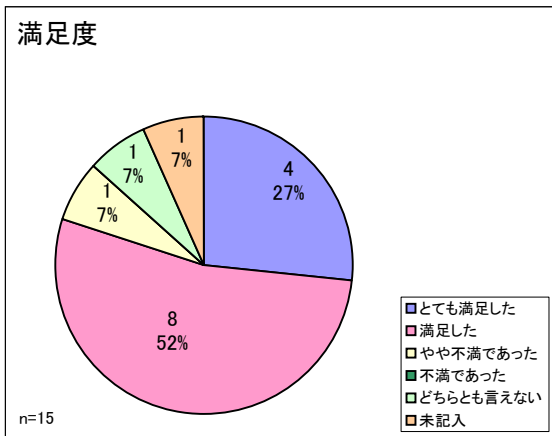
このアンケートは、今後の研究開発評価ワークショップが、評価実務者・評価研究者にとって更に有意義な場になるよう、ご参加いただきました方々のご意見やご要望を伺い、今後の企画・運営に役立ててゆくためのものです。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

- あなたの所属・立場について、お聞かせください。(該当する番号に○印を付してください。)
【所属】 ① 文部科学省（施設等機関を含む） ② 文部科学省以外の府省
③ 文部科学省所管の独立行政法人 ④ 文部科学省以外の府省所管の独立行政法人
⑤ 大学 or 大学共同利用機関法人 ⑥ その他
【立場】 ① 評価実務者（事務局職員） ② 評価実務者（教員・研究者）
③ 評価研究者 ④ その他
【現在の業務暦】（ ）年
- ワークショップに参加しようと思ったのは何故ですか。(該当する番号に○印を付してください/複数回答可)
① 仕事に役立つと思ったから
② 新たな知見が得られると思ったから
③ 講師・講義内容に興味があったから
④ グループ・ディスカッションの内容に興味があったから
⑤ 他機関の担当者等との情報交換の場になると思ったから
⑥ 上司、知人等に勧められたから
⑦ 主催者が文部科学省だったから
⑧ その他（具体的に：)
- ワークショップについての感想をお聞かせください。(該当する番号に○印を付してください。)
(1) ワークショップは、あなたの仕事や研究にどの程度参考となりましたか。
① とても参考となった ② 参考となった ③ あまり参考とならなかった
④ 全く参考とならなかった ⑤ どちらとも言えない
(2) ワークショップを受けて、新たな知見が得られましたか。
① まさにそう思う ② ややそう思う ③ あまり思わない ④ 全く思わない ⑤ どちらとも言えない
(3) ワークショップに対する満足度はどの程度でしたか。
① とても満足した ② 満足した ③ やや不満であった ④ 不満であった ⑤ どちらとも言えない
- グループ・ディスカッション（全体討論を含む）の実施方法について、お聞かせください。(該当する番号に○印を付してください)
① 改善の余地がある ② 現状でよい ③ どちらとも言えない
また、①「改善の余地がある」とご回答いただいた方は、どのような点を改善した方がよいか、具体的にお書きください。
- 今後、このようなワークショップを開催した場合、参加しようと思えますか。(該当する番号に○印を付してください)
① まさにそう思う ② ややそう思う ③ あまり思わない ④ 全く思わない ⑤ どちらともいえない
また、具体的な理由をお書きください。
- 今後、ワークショップで取り上げて欲しいテーマや希望する講師等がありましたら、具体的にお書きください。
- ワークショップ全般（実施方法、場所、時期など）に関するご意見、ご要望がありましたら具体的にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

平成20年度 研究開発評価ワークショップ アンケート集計結果





グループ・ディスカッションについて「改善の余地がある」と回答した参加者の意見

【内容についての説明】

○討議の内容をもう少し明確にすべき。

【事前の資料配付】

○当日限られた時間の中で、当日配布の資料をサンプルとして議論をするには難あり。

事前にテーマと課題を配布して頂きたい。想定課題が生かせると考えます。

○可能であれば、事前にグループ・ディスカッション用の資料がほしい。

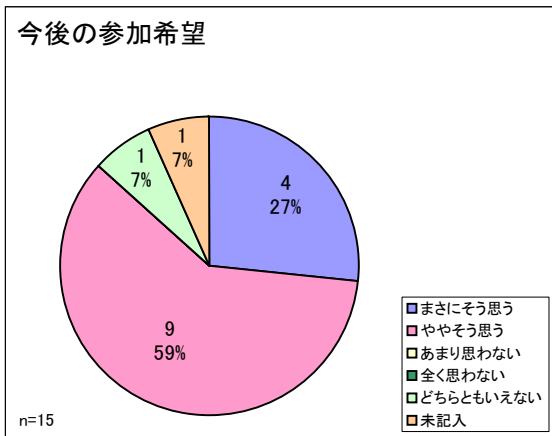
【時間の設定】

○むずかしいとは思いますが、もう少し時間が長い方がよかったですと思います。

○もう少し時間が欲しい。休憩をはさんで2時間くらい。

【グループの設定】

○人数が足りない。



「① まさにそう思う」

- 各府省の評価制度の概要について理解できた。情報ネットワークに役立った。
- 大学における評価業務がまだ確定していないため。

「② ややそう思う」

- ワークショップの手法
- もう少し実際にそった方々をグルーピングして、実情に沿ったWSならより望ましい。
但、厳しい評価を前提として。

今後、取り上げて欲しいテーマや希望する講師等

- 今後、研究予算や研究環境が厳しくなるかと思いますが、その中でどのように研究政策を進めていくか。
- 研究戦略と研究評価
- 研究のコーディネート、研究の目利きの育成
- 学内外の共同研究組織の形成と競争的資金の獲得に向けたWS
- 大学に関連した事例があれば良いかも。

ワークショップ全般に関する意見・要望

- 東京駅に近い便利な場所で良かったです。
- 毎年1月、2月、3月は自己評価・点検の時期のため、できればこの時期を外して実施していただきたい。
- 感想ですが、同じテーマ課題で(グループ報告を聞いて)ワークショップがされたとは思えません。Cグループでしたが、報告を聞いてやや驚きました。
- 事前に、ワークショップ課題(テーマ)等の資料配付いただけると有難い。
- 法人評価の説明会と同じ日時にするのはやめて下さい。

研究開発評価推進検討会について

1. 趣旨

第3期科学技術基本計画において、研究開発の効果的・効率的な推進、国民への成果の還元が求められており、研究開発評価の重要性も益々高まってきている。その中で、評価対象がより複雑な対象に拡大し、また、評価に対する要求水準も高度なものになりつつあり、評価システムの見直しが不可欠となっている。

このため、科学技術・学術政策局評価推進室において実施している様々な研究開発評価に関する施策や事業を、より効果的かつ体系的に企画・実施することを目的として、研究開発評価推進検討会（以下「検討会」という。）を設置し、助言及び支援を得ることとする。

2. 検討事項

- (1) 研究開発評価を推進する施策に関すること
- (2) 研究開発評価の研修やシンポジウムに関すること
- (3) 研究開発評価の情報収集や現地調査に関すること
- (4) その他

3. 委員の構成等

- (1) 検討会の委員の構成は以下のとおりとする。
- (2) 必要に応じて委員の追加等を行うことができる。
- (3) 必要に応じて別紙以外の者からの協力を求めることができる。

4. 実施期間

平成20年4月23日から平成21年3月31日までとする。

5. その他

検討会の事務は、科学技術・学術政策局計画官付において行う。

研究開発評価推進検討会委員名簿

伊地知 寛博	成城大学社会イノベーション学部教授
内田 理之	理化学研究所筑波研究所研究推進部企画課長
岡村 浩一郎	科学技術振興機構研究開発戦略センターフェロー
奥居 正樹	広島大学大学院社会科学研究科准教授
小林 信一	筑波大学大学院ビジネス科学研究科教授
小湊 卓夫	九州大学高等教育開発推進センター准教授
桜井 誠人	宇宙航空研究開発機構研究開発本部未踏技術研究センター主任研究員
寫田 敏行	茨城大学評価室助教
鈴木 潤	政策研究大学院大学教授
鈴木 達也	日本学術振興会研究事業部参事(兼)研究事業課長
永田 潤子	大阪市立大学大学院創造都市研究科准教授
林 隆之	大学評価・学位授与機構評価研究部准教授
林部 尚	科学技術振興機構経営企画部調査役

(以上13名、五十音順、敬称略)